

# ヘロドトスの射程

—— 普遍史・他者性・予型論 ——

秋 山 学

## 序. 本稿の視座

筆者は先に「ヘロドトスの「父性」——「東方予型論」の構築に向けて——」<sup>1</sup>を公けにして、ヘロドトスが持つ学問諸分野への拓けのあり方を検証した。全9巻より成るヘロドトスの『歴史』は周知のように、ペルシア戦争を描いた作品と評されるにもかかわらず、実際の戦記部分はせいぜい後半の4巻に過ぎない。『歴史』の外枠は、あくまでもペルシア王国4代（キュロス、カンビュセス、ダレイオス、クセルクセス）の交替記である。ヘロドトスのペルシア年代史は、オリエント学においても旧約聖書とともに、旧約聖書の時代に関する貴重な証言として重要であるが、彼が『歴史』を記すに当たってペルシア王の交替の枠組みを用いたことには、さらに何らかの意義付けが可能なのであろうか。

ところで、ギリシアの古典古代期には、ヘロドトス、トゥキュディデス、クセノフォンという偉大な史家による歴史記述が生まれた。ヘロドトスの『歴史』、トゥキュディデスの『戦史』、クセノフォンの『ギリシア史』と『アナバシス』といった作品は、いずれも原典全体が欠損なく伝えられている。またアリストテレスによる『アテナイ人の国制』も、パピルスにより伝えられ、発見されてその前半は年代記風であることが明らかになった。しかしながら彼らに続く時代、すなわちヘレニズム時代からローマ時代（帝政初期、後1世紀まで）にかけては、膨大な歴史記述を手がけた著作家が多数挙げられるにもかかわらず、彼らの作品はいずれも部分的にしか伝えられていない。そのような史家として挙げられるのは、ローマ共和政期のポリュビオスとディオドロス・シクルス、ローマ帝政期に生きたハリカルナッソスのディオニュシオス、アッピアノスそれにディオオン・カッシオスである。

彼ら古代史家たちの作品中、「断片」として伝わるものの多くは、10世紀に「マケドニア朝ルネサンス」を主導した皇帝、コンスタンティノス・ポルフェロゲネトス（在位912-959）が編纂させた抜粋集に負うものである。この集成

は、後述のようにヘロドトス、トゥキュディデス、クセノフォンから、ポリュビオス、ディオドロス、ディオニュシオス、ヨセフス、アッピアノス、アッリアノス、ディオ・カッシオス、それにエウセビオス、ゾシモス、マララス、ゲオルギオス・ハマルトールスらまで、古典古代期からヘレニズム期、そしてビザンツ時代にまでおよぶ史家たちの抜粋集であった。また辞典『スタ』<sup>2</sup>の編纂者はこの「抄録集」を用いたことが知られている。古典文献学上、史家たちの「断片」を編む際の主たる典拠となるのが、この百科全書主義皇帝コンスタンティノスの命で編纂された「抄録集」なのである。

このコンスタンティノスは、8/9世紀ごろより新たに開発された小文字書体により、古典作品の複製作業を精力的に進めさせたほか、ビザンティン典礼の様式を完成に近づけ、祈祷サイクルの最終的な骨格を定めて、ほぼ現行の典礼式次第に確立したことで知られる<sup>3</sup>。マケドニア朝ルネサンスとは、祈祷サイクルを基盤とした修道制の整備と、その修道士たちを擁しての写本筆写活動とを、皇帝の命のもとに組織的に行った包括的文化復興の時代であった。

筆者はさらに、典礼学上の論考として「ビザンティン典礼による聖体礼儀の神学——聖バジル典礼をテキストに——」<sup>4</sup>を発表した。この拙稿において筆者は、ビザンティン典礼における包括的秘跡の地平を明らかにすることに努め、ビザンティン典礼にあって「聖体制定句」と「エピクレシス」の中間に置かれた「アナムネシス」の部分に着目し、そこで語られる司祭の黙唱句に、最後の晩餐から終末の聖霊降臨までの出来事、すなわち受難・十字架・埋葬・復活・昇天・再来という事象がすべて尽くされていることを指摘した。

一方、本稿とほぼ並行して執筆した『『東方教会法典』の神学——「十字架上の聖体」の内的構造——』<sup>5</sup>では、上述のようなビザンティン典礼を奉ずる東方教会の特質が、「十字架上の聖体」への与かりを拓くものであるという特質を指摘した。すなわち同教会が奉ずる『東方教会法典』（1990年発布）が、十字架上の＜聖体＝教会共同体＞の内実を規定する法典として、秘跡への参与のあり方を厳格に定めると同時に、段階を踏みながら外界をこの共同体へと受容して普遍世界に及ぶ姿勢を明確に打ち出していることを明らかにした。そして＜「カトリック性」「キリスト教性」と段階を踏むこの「共同体への受容」のための基準を、さらに極東の異文化国においていかに展開させうるか＞に關して、稿を改めて論ずる旨を記した。

本稿はマケドニア朝期において、「百科全書主義」に基づいて古代史家たちの原典抜粋作業が行われたことの背景に「普遍史観」を置き、ビザンティン典

礼の特質との波調の等しさを背景に考察しようと試みるものである。ヘロドトスを先駆とする「普遍史家」たちによるペルシアやその後裔パルティアに関する史的記述が、一般世界からの普遍的な「与かり」の可能性を拓くものであることを明らかにすることができれば幸いである。

## 1. 史家たちの覆う年代について

まず、先に挙げた5人のギリシア語歴史家について、資料上の伝存状況を確認しておこう。

ポリュビオス（前200－118）は第1次ポエニ戦争以降の歴史を40巻より成る『歴史』に収めたが、そのうち完全な形で残存するのは最初の5巻のみである、ここには前264（第1次ポエニ戦争勃発）から前216年（カンナエの戦）までの歴史が盛り込まれており、それ以降は「抄録」の形で残る。抄録に関しては、第1巻から第18巻の抄録はヴァティカン・ウルビノ102（F）写本により伝わるため、第6巻以降の抄録は主としてこの「古代抄録」によることになるが、第17巻、および第19巻にはこの抄録も失われている。それ以降の巻は主として上述の「コンスタンティノスの抄録集」によるが、第26、37、40の各巻にはこの抄録集に採られた断片がない。第39巻の末尾は前145から144年にかけての記録となっている。

次にディオドロス・シクルス（前80－20）はシチリアのアギュリオンの生まれで、史書『歴史文庫』全40巻を遺した。彼は多くの年代誌類に依拠し、今では失われてしまった歴史書の面影を間接に伝え、ある時代に関してはギリシア史の唯一の典拠となっている。内容は、第1巻 エジプトの神話、王、習慣。第2巻 アッシリアの歴史、インドの記述、スキュティア、アラビア、オケアノスの島々。第3巻 エチオピア、アフリカのアマゾネス、アトランティスの住人、神々の起源。第4巻 ギリシアの主要な神々、アルゴナウタイ、テセウス、テーバイを攻める七将。第5巻 諸島誌。第6～第10巻 断片：トロイア戦争よりB.C.480年まで<sup>6</sup>である。そして第11巻からは年代記の様式を採り、内容は 第11巻 480－451年、第12巻 450－416年、第13巻 415－405年、第14巻 404－387年、第15巻 386－361年、第16巻 360－336年、第17巻 335－324年、第18巻 323－318年、第19巻 317－311年、第20巻 310－302年、第21－40巻 断片（301－60年）となっている。このうち21－26巻の断片は「エクロガ・ヘシュリアーナエ」に、また31－40巻からの比較的長い断片はビザン

ティン時代のフォティオス（810－893）が記した『文庫』に含まれているが、第27巻（207年）－30巻（168年）の部分は完全に「抄録集」に負うことになる。

ハリカルナッソスのディオニュシオス（前1世紀後半ごろ）は、ローマの起源から第1次ポエニ戦争の開始時（前264）までの歴史を『ローマ古代史』全20巻につづった。この作品は最初の9巻が完全に、また第10および11巻がほぼ残存し（前441年まで）、第12巻から20巻までは抄録で伝わっている。抄録の半分ほどは「コンスタンティノスの抄録集」によるが、それ以外には、第20巻の数章を『包囲について』という作品名で収めるアトスの写本（A、現パリ所蔵）、および15世紀のミラノ写本（ミラノQ13sup.）およびその複写本（ミラノA80sup.）が知られている。

アッピアノス（後1世紀後半－2世紀前半）は、ローマ初期よりウェスパシアヌス帝に至る歴史を24巻にまとめた。その内訳は、順に 序、1 ローマの王政期、2 イタリア、3 サムニテ、4 ケルト、5 シチリア、6 イベリア、7 ハンニバル、8 カルタゴ（リビア・ノマド）、9 マケドニア・イリュリア、10 ギリシア・イオニア、11 シリア（パルティア・偽）、12 ミトリダテスVI世、13－17 ローマの内戦、18－21 エジプト、22 トラヤヌス帝まで、23 トラヤヌス帝によるダキア・ユデア・ポントゥス遠征、24 アラビア となっており、最初の5巻、第10巻および最後の7巻が失われているが、第11巻にはセレウコス朝シリアの興起、そしてパルティアがセレウコス朝より離反した次第がつづられている。また第13－17巻は共和政最後の100年間を扱い、独自の序文を有するため『内乱史』と呼ばれる。V写本（ヴァティカン、141）はイベリア、ハンニバル、カルタゴ、序文、ケルトの部分を取り、またイリュリア、シリア、ミトリダテス、内戦部はOと呼ばれる一群の写本により伝わる。したがってローマの王政期からシチリアまでのテキストは「抄録」、『スダ』、およびフォティオスに拠ることになる。

ディオンのカッシオス（150－235）はローマ建国からアレクサンデル・セウエルス帝の時代まで（－229）の歴史をつづる80巻の大著を著した。そのうち第36巻から60巻までの部分が11の写本で残存する。それは前68年から後47年の期間に該当する。ほかに第79巻に当たる部分（78.2.2－79.8.3）が1写本13葉（ヴァティカン、1288、5/6世紀の成立）により伝わる。他の巻については、第36巻から末巻までは11世紀のヨハネス・クシフィリノスによる梗概で伝わり、第1巻より第21巻までは12世紀のゾナラスに拠る梗概が伝わっている。このディオンに関しては、伝存する部分が本稿の対象時期とほとんど重ならない

ため、伝承史の内容に関わる以外には、以下の本文では登場しない。

彼ら5人の史家に続き、本稿で参照する他の史料を挙げておく。ラテン語で記述したアウグストゥス帝期の史家ポンペイウス・トログスは、『フィリッポス以降の歴史』（フィリッピカ）全44巻を著した。この作品には、3世紀のユニアヌス・ユスティヌスによる「梗概」（『地中海世界史』）が伝わる<sup>7</sup>。その題目に関しては、フィリッポスが第7巻末尾より第8・9巻にわたって登場し、ヘレニズム（・ローマ）時代の全歴史が、彼およびアレクサンドロス、そしてその後継者（ディアドコイ）、さらにその後継者（エピゴノイ）に結びついていることを予感させるものとなっている。全体の内容は、第1－6巻：メソポタミアとギリシア、第7－12巻：マケドニア、第13－40巻：ローマに屈するまでのヘレニズムの諸王国、41・42巻：前20年までのパルティアの歴史、43・44巻：ローマの王政期、アウグストゥスによるヒスパニア戦役までのガリア・ヒスパニアの歴史である。アッリアノスの『アレクサンドロス大王東征記』（全7巻）およびクルティウス・ルフスの『アレクサンドロス大王の歴史』（全10巻、後半の8巻分が現存）が336年から323年にかけて覆うのに対して、フィリッポスに関するその前史をめぐっては、ユスティヌスによるトログスの原本の「抄録」が貴重な価値をもつ。この『抄録』により、われわれはポエニ戦争以前のカルタゴの歴史、パルティアの歴史を知ることができる。

このトログスは、優れた「普遍史」的な著作家として古来著名である。この「普遍史」という概念は、いまだに極めて曖昧であり、特にキリスト教世界の以前と以後とでその意味合いが大きく異なる。キリスト教世界での歴史記述にこの語を当てはめた場合、簡略化すれば「普遍史」とは「聖書の記述に基づいて記された世界史」だと言いうる<sup>8</sup>。一方、キリスト教以前の歴史記述に当てはめる場合、それはほぼ、ローマという世界国家のうちに諸国が組み込まれてゆく過程を意識して記述した歴史だと言える。現存する史家たちの作品中、この表現が最初に現れるのはポリュビオス（前210－120）であり（『歴史』5.33.1 „ta katholou”）、彼はそのような意識で歴史を記述している。そのポリュビオスは、神話時代（1069/8）より340年に至る世界史30巻を記したエフォロス（前405－330）を「普遍史家」としての自らの先駆者と見なしているが、このエフォロスの作品は散逸した<sup>9</sup>。

そもそも厳格な意味で「普遍史家」とは、その語義のとおり「人類史を、太古より、知られている世界全域にわたって扱った歴史家」ということになるであろうが、その意味での先駆者は問題なくヘロドトスであり、彼はペルシアか

らエジプト、スキュティアからギリシアまで、実にさまざまな時代の事柄を記述している<sup>10</sup>。下って前1世紀、ローマ史の史家としては、先のディオニュシオスの作品以外にポセイドニオス（前135－51）、ストラボン（前64－後21）の作品が知られているが、これらは現存しない。また上のディオドロス以外に、前1世紀後半ユダヤ・ヘロデ王の大臣を勤めたダマスコのニコラオスによる『歴史』144巻があったが、これも失われた<sup>11</sup>。したがってポリュビオスに次いで『普遍史』を著したのは、現存史家の中ではディオドロスということになる（『歴史文庫』1.3.2参照）。そして「異民族の歴史がローマに注ぎ込む」というシェーマにおいて歴史を記すという点で、ポリュビオスと類似しているのが上述のアッピアノスである。したがって本稿では「普遍史家」の系譜として、ヘロドトス、ポリュビオス、ディオドロス、アッピアノスを考えておくことにする（ディオニュシオスの「ローマ史」は古代史でもあり、そこに普遍史性は乏しい）。もっともローマ時代の史家たちが、総じてこの普遍史観を持っていたということは確認しておいてよいだろう。

このほか「伝記作家」と呼ばれる人々の作品を援用して、本稿では以下の記述をおこなう。ギリシア語で叙述したプルタルコス（後45－120）と、ラテン語で記したコルネリウス・ネポス（前99－24）であるが、プルタルコスのほうが時代が下り、かつローマ期の伝承を含むため、次章からは先にネポスを軸に、時代順に英雄を辿ってゆく。

また、地誌の分野でも史料を提供する人物がある。ストラボンとパウサニアス（後2世紀）であるが、特にパウサニアスは『ギリシア案内記』全10巻を著した。内容は、Ⅰアッティカ、Ⅱコリントス、Ⅲラコニア、Ⅳメッセニア、Ⅴエリス①、Ⅵエリス②、Ⅶアカイア、Ⅷアルカディア、Ⅸボイオティア、Ⅹフォキス であり、アッティカから始まってペロポネソス半島に入り、時計回りに廻って中央部のアルカディアに至り、次いでアッティカの西北部に位置するボイオティア、その彼方のフォキスへと至る構図となっている。一方ストラボンの作品としては、（前述のように史書は失われたが）『地誌』17巻が伝存しており、内容は、Ⅰ・Ⅱ序論と学説史 Ⅲスペイン Ⅳガリア、ブリタニア、アルプス Ⅴイタリア〔カンパニアまで〕 Ⅵ南イタリアとシチリア Ⅶ北・東・中央ヨーロッパ、トラキア〔断片〕 Ⅷマケドニア・ギリシア Ⅸアテナイ・ボイオティア・テッサリア Ⅹアイトリア、クレタ Ⅺ小アジア・アルメニア Ⅻ小アジア・カッパドキアなど Ⅼ小アジア・レスボスなど Ⅽ小アジア・イオニアなど Ⅾインドとパルティア Ⅿアッシリア・バビロニアなど ⅰエ

ジプト、エチオピア、北リュビア となっている。

なおこれ以外に年代史として援用することになるのは、リウィウス（前59―後17）、タキトゥス（後55―120）、スエトニウス（後75―140）の作品である。まずリウィウスは、ローマの建国（前753）以降、前9年（アウグストゥスの養子ドルゥスの死）までの歴史を『ローマ建国史』142巻に著したが、第1―10巻および第21―45巻のみ原典が残存、他は第136、137巻を除いて梗概のみが残る。第10巻の末尾は第1次ポエニ戦争の開始時（264）に及び、第21巻は第2次ポエニ戦争を扱い、以降の現存部分はマケドニアおよびシリア戦争を扱っていて、第45巻の末尾は第3次マケドニア戦争（172―168年）の終結（前167年）に至る。またタキトゥスの『年代記』（ティベリウス帝からネロ帝まで）と『同時代史』（68/69年の記録）、およびスエトニウスの『ローマ皇帝伝』（カエサルからドミティアヌス帝まで；前84―後96年）については、本稿ではパルティアの歴史を参照する際、ユスティヌスに加えて援用する。

## 2. 伝記資料 ①コルネリウス・ネポス

さて歴史事項を綴る場合に二通りの方法があり、年代史作家とならんで、主要人物にスポット・ライトを当てて記述する伝記作家のあり方も有力である。以下では、特にギリシア（ないしローマ）と東方諸国との関連で伝記記述を読んでゆく。

まずコルネリウス・ネポスの『英雄伝』は、ギリシアの将軍の伝記を20章にわたって詳述している<sup>12</sup>。

### 1 ミルティアデス

ミルティアデス（550―489）は、ペルシア戦争におけるマラトンの戦（490）での英雄として記憶される。ミルティアデスは、アテナイ・プラタイアイの連合軍より成る約1万人の軍勢を率い、倍する戦力のペルシア軍と対峙した。重装歩兵の密集隊形が絶大な功を奏し、連合軍はみごとにペルシア軍を撃破する。その翌年、彼はパロス島に遠征したが失敗して失脚し、戦傷がもとでまもなく没する。これらの記事はヘロドトス『歴史』第6巻（113；136）に載る。

### 2 テミストクレス

テミストクレス（527―460）は、ペルシア戦争におけるサラミスの海戦（480）の英雄である。彼は上のミルティアデスが失脚した後、反ペルシア派の指導者としてアテナイを掌握する。481年夏に首都スサを陥ったダレイオスは、ギリ

シアに向けて大遠征軍を遣わす。これに対してテミストクレスは、アテナイ中層・下層の男子すべてを艦船に乗り込ませ、婦女子はトロイゼンとサラミスに避難させた。ペルシア海軍を巧みにサラミス湾の海峡隘路に導きこんだギリシア海軍は、480年9月下旬、衝角戦法によって圧勝を収める（ヘロドトス8.90以下）。その後テミストクレスは、470年の陶片追放でアテナイを追われる。彼はヘロドトスの第7巻以降、特に第8巻に多く登場する。

### 3 アリステイデス

アリステイデス（将軍位490-467）は高潔さで著名なアテナイの将軍。489/8のアルコン。テミストクレスとの政争に敗れ、陶片追放となるが、480年に恩赦を得て帰国。479年、ペルシア戦争でのプラタイアイの戦で、マルドニオス指揮下のペルシア陸上部隊に対し、ギリシア連合軍を勝利に導く。477年、デロス同盟納入金の査定役となる。彼もヘロドトス8.79-9.28に登場する。

### 4 パウサニアス

パウサニアス（将軍位478-471）は、アリステイデスとともにプラタイアイにおいてギリシア連合軍を指揮し、重装歩兵戦術を採ってペルシア将軍マルドニオスに快勝したスパルタの将軍（ヘロドトス9.78.3）。同日、イオニアのミュカレに上陸したギリシア部隊もレオテュキデスの指揮下に勝利を収め（9.100）、続いてヘレスポントスに近いセストスを攻略し（9.114）、ペルシア戦争は事実上終結し、これをもってヘロドトス『歴史』の筆も掲げられることになる。なお彼はトゥキュディデス『戦史』1.94に登場する。

### 5 キモン

キモン（510-449）はミルティアデスの子（ヘロドトス6.136）。478年よりアテナイの将軍を務め、467年にエウリュメドンの河口でペルシア艦隊を破ったことで記憶される。テミストクレスに反対し、スパルタと協調してペルシアに対抗しようとしたため、のちにペリクレスと衝突した。461年陶片追放に遭い、449年ペルシアに対する作戦中キプロスで没する。彼の生涯は、ペルシア戦争とペロポネソス戦争の戦間期に当たり、トゥキュディデスの第1巻中「アテナイ50年史」には登場するものの、ディオドロスの10.30.1-12.4.6にはさらに詳しく載る。ユスティヌスでは2.15に挙がる。

### 6 リュサンドロス

リュサンドロス（将軍位408-395）はスパルタの将軍、407年将軍となり、405年ペルシアの援助により艦隊を再建し、アイゴスポタモイの海戦（405）にてアテナイを倒す。アテナイには30人会を設けるなど、複数のポリスで寡頭政権



を建てる。ボイオティアのハリアルトスを攻囲中、395年に没。トゥキュディデスには載らず、クセノフォン『ギリシア史』<sup>13</sup> 1.5.1-3.5.19, デイオドロスでは13.70.1-14.81.2に挙がる。

## 7 アルキビアデス

アルキビアデス(450-404)はアテナイの将軍にして政治家。415年のシチリア遠征の際、ヘルメス神像不敬罪の嫌疑を受けて召還されたが脱走、スパルタ側に投降するが、その後アテナイに帰還し、410年キュジコスの戦ではペロポネソス軍を破る。30人僭主時代に民主派の領袖として標的にされたため、ペルシアのブリュギア総督で親スパルタのファルナバゾスを頼って小アジアに渡る。だが小キュロスの着任に伴い、ファルナバゾスにより404年に殺害される。『ギリシア史』2.3.42までに載るが、殺害の次第はクセノフォンには載らず、デイオドロスに拠ることになる(14.11.1)。

## 8 トラシュブロス

トラシュブロス(将軍位411-390)はアテナイの政治家。411年の寡頭政、その後の5000人政体、404-403年の30人僭主政体いずれにも関与し、戦後最終的にアテナイに民主政治を復活させるが、極端な寡頭派によって処刑される。トゥキュディデス8.73以下、および『ギリシア史』4.8.3まで、またデイオドロス13.38.3-14.99.5に載る。

## 9 コノン

コノンはアテナイの将軍(将軍位410-394)。アイゴスポタモイの海戦(405)で逃走するが、399年キュプロスにおいてペルシア艦隊を組織、ファルナバゾスとともにスパルタと戦い、クニドスでスパルタのペイサンドロスを破り(394)、スパルタ海軍を破壊した。395年からコリントス、アテナイ、テバイ、アルゴスはペルシアの援助を受け、同盟してスパルタと戦っていたが(コリントス戦争)、スパルタはネメア、コロネアで勝利したものの、同盟軍はコリント地峡部を死守、コノンによるこのクニドス沖の海戦での勝利は決定的となった。なおコノンはその後、ペルシア海軍の援助を受け、ペイライウスの城壁を再建したが、海洋帝国復活の夢は成らなかった。トゥキュディデス7.31以下、『ギリシア史』4.8.16までに載り、デイオドロスでは13.48.6-14.85.4に挙がる。

## 10 ディオン

ディオンはシラクサの王(367-353)。プラトンの友人として知られるが、デイオドロスはシチリア島出身ということもあり、詳しく掲載している(16.6.1

ー16.31.7)。『ギリシア史』には載らない。

#### 11 イフィクラテス

イフィクラテスはコリントス戦争（393－391）期におけるアテナイの著名な将軍（将軍位394－356）。377年ファルナバゾスの許に遣わされ、374年にはエジプトで、ペルシア軍中のギリシア人の指揮を取る。『ギリシア史』4.4.9－6.5.52，ディオドロスでは14.86.3－16.21.4に載る。

#### 12 カブリアス

カブリアスもコリントス戦争（393－391）期におけるアテナイの将軍（将軍位393－356）。コリント，エジプトなどに行軍する。『ギリシア史』5.1.10－7.1.25，ディオドロスでは14.92.2－16.7.3に載る。

#### 13 ティモテオス

ティモテオスはコノンの子，377年カブリアスをうけてアテナイ将軍となり（将軍位376－338），アテナイの城壁を復興する。『ギリシア史』5.4.63－6.2.11，ディオドロスでは15.29.7－16.21.4に載る。

#### 14 ダタメス（405－362）

ダタメスはこのネ波斯『英雄伝』によって主に知られる。ペルシア人として，アルタクセルクセスⅡ世（在位404－359）の護衛兵次いでカッパドキアの太守となり，360年代にアルタクセルクセスⅡ世に反旗を翻すが，騒乱のうちに没した。ディオドロス（15.91.2－7）にも挙がる。

#### 15 エパメイノンダス

エパメイノンダスはテバイの著名な将軍（将軍位375－362）。371年レウクトラの戦でスパルタを破るが，マンティネイアの戦（362）で戦死。『ギリシア史』7.1.41－5.25，ディオドロスでは15.50.6－87.6に載る。

#### 16 ペロピダス

ペロピダス（410－364）はテバイの指導者で将軍（将軍位372－364）。379－378年，テバイに民主的規則を定め，エパメイノンダスとともにテバイの全盛期を現出。キュノスケファライの戦（364）で勝利をおさめたが戦死。『ギリシア史』7.1.33以下，ディオドロスでは15.50.6－80.5に載る。

#### 17 アゲシラオス

アゲシラオス（Ⅱ世，前445/399－359）はスパルタ王。ペルシアの太守ティッサフェルネスを倒し（396－395），コリントス戦争で戦果を挙げ（395），コロネイアの戦（394）でアテナイとボイオティアを倒し，大王の和約をギリシア人に課した（386）。レウクトラの戦（371）での敗北を招くが，エパメイノ

ンドスのテバイからスパルタを守った。『ギリシア史』3.3.1以下、ディオドロスではおもに14.83.3-15.93.6に載る。クセノフォンによる伝記も残る。

#### 18 エウメネス

エウメネス（前361-316；将軍位323-315）はカルディアの人。アレクサンドロスの下で将軍を務め、その死後カッパドキア総督となった。アレクサンドロスの家系にとって最後の擁護者であった。帝国摂政ポリュペルコンの下、アジアの全権将軍としてアンティゴノス・モノフタルモスと戦うが、317/6年パライタケネで敗れ、316年ガビエネの戦にも敗れて殺される。ディオドロス19.27-32、ユスティヌス13.4以下を参照。

#### 19 フォキオン

フォキオン（前402/1-317）はアテナイの将軍。344年ごろより政治活動を行い、フィリッポスとアレクサンドロスの時代の平和論者として活躍する。ファレロンのデメトリオスらとともに貴族派に属し、ポリュペルコンに対抗してカッサンドロスを支持した。だがカッサンドロスはポリュペルコンによってマケドニアを追われ、アテナイでは平民派が実権を握り、フォキオンは317年、反逆罪の嫌で処刑される。弁論家の作品に登場するが、アッリアノスの『アレクサンドロス伝』には現れず、ディオドロス16.42.7-18.67.6に載る。ユスティノスにも現れない。

#### 20 ティモレオン

ティモレオンはコリントスの将軍（将軍位346-339）。高潔さで知られ、兄弟のティモファネスがコリント僧主になろうとしたとき、これを殺した(365)。344年にシラクサの人に請われて当地に派遣され、クリミソス川の戦（339）で応援に駆けつけたカルタゴ軍に圧勝した。シチリア関連のためディオドロス16.65.3-90.1に詳しく載る。ユスティノスには載らない。

#### 21 諸王 ～ペルシア、マケドニア、シリア～

ペルシアではキュロスとダレイオス、クセルクセスと二人のアルタクセルクセス、マケドニアからはフィリッポスとアレクサンドロス大王、エペイロスのピュッロス王、シケリアの大ディオニュシオス王、アレクサンドロスの後継者としてアンティゴノス、デメトリオス、リュシマコス、セレウコス、プトレマイオスが挙がっている。このうちアレクサンドロス大王と、エペイロスのピュッロス王、それにペルシア王アルタクセルクセスⅡ世は後のプルタルコスでも取り上げられているため、ここで解説を加えておく。

ピュッロス（319/297-272）はエペイロスの王で、302年に王位を追われた

がデメトリオスに仕え、プトレマイオス王の助けによって297年に復位。286年にテッサリアとマケドニアの一部を保有したが、リュシマコスによって追い返される。のちに前280年ごろローマと戦い、大きな犠牲を払って勝利を収める。その後274年マケドニアに侵入、272年アルゴスを攻囲する間に殺されている。ディオドロスでは、断片部以外では16.72.1, 19.35.5でわずかに顔を覗かせる。ユスティヌス35.3を参照。

アレクサンドロス大王（356－323）はマケドニアの王でフィリッポスの子。20歳で即位し、ギリシアの反乱を平定したのち、334年にギリシア・マケドニア連合軍を率いて東方遠征に出発、グラウニコス河畔の戦、イッソスの戦、アルベラの戦でペルシア軍を連破し、330年にペルシア帝国を滅ぼす。東進を続けてインド西北部に達したが、324年バビロンに凱旋、翌年熱病のために急逝した。アッリアノス『東征記』全7巻はこの間336年から323年までの遠征記録である。ディオドロスでは第17巻のすべてがアレクサンドロスに充てられている。

アケメネス朝ペルシアのアルタクセルクセスⅡ世（404－359）をめぐっては、即位後間もない401年に、サルディス駐留の軍司令官であった弟の小キュロスが反乱を起こし、その次第はクセノフォン『アナバシス』に詳しい。アンタルキダスの和約を提示する次第は、『ギリシア史』5.1.31に載る。ディオドロスでは14.11.2－15.93.1に詳しい。

なおこれに続き22 ハミルカル、23 ハンニバル の章が続くが、ヘロドトスの射程を東方史に問う本稿の趣旨とは直接連関することはないので省略する。また他に「ローマの歴史家」からは、カトーとアッティクスの二名が『英雄伝』に加えられ、残存している。

### 3. 伝記資料 ②プルタルコス

次にプルタルコス『英雄伝』に移ろう。この作品は、ギリシアの英雄とローマの英雄の対比を主眼とするため、ローマの英雄が必ず登場する。これは本稿の主眼とは離れるが、基本的な紹介を加えておく。丸付き数字はネ波斯における順序である。

#### 1 テセウスとロムルス〔付比較〕

テセウスは神話に登場するアテナイの伝説的英雄。ロムルス（在位753－716）はローマ初代の王。双子の兄弟レムスを退けた。

## 2 リュクルゴスとヌマ〔付比較〕

リュクルゴスはスパルタの立法家で、スパルタ特有の国制を定めた人物として記憶される。ヌマ・ポンピリウス（715-673）はローマ第2代の王。

## 3 ソロンとプブリコラ〔付比較〕

ソロン（638-559）はアテナイの政治家で、594年に改革を実行し、貴族と平民との対立により国家的危機に陥ったアテナイを再興させた。プブリウス・ワレリウス・プブリコラ（560-503）はブルートゥスとともにローマの王政を廃し、ブルートゥスが戦死したのちは初代の執政官となる。ソロンはヘロドトス第1巻29-32に登場する。

## 4 テミストクレス②とカミッルス

テミストクレス（528-462）は前出。カミッルスは405年から396年にかけて、独裁執政官としてウェイイ族を攻略し、また390年ガリア人がローマを占領した際、これを退散させた將軍。

## 5 ペリクレスとファビウス・マクシムス〔付比較〕

ペリクレス（500-429）は前出。クイントゥス・ファビウス・マクシムス・ウェルコースス・クンクタートル（275-203）は慎重な戦術でハンニバルを疲弊させ、突撃した副官ミヌキウスを救出し（217）、209年にはタレントゥムを奪還した。

## 6 アルキビアデス⑦とコリオラヌス〔付比較〕

アルキビアデス（450-404）は前出。ガイウス・マルキウス・コリオラヌス（在位527-490）は貴族派で平民と対立し、ウォルスキー族に身を投じた。

## 7 ティモレオン⑩とアエミリウス・パウルス〔付比較〕

ティモレオン（-338以降）は前出。アエミリウス・パウルス（229-160）は、第3次マケドニア戦争の際、168年にピュドナの戦でマケドニア王ペルセウスを破る。

## 8 ペロピダス⑬とマルケッルス〔付比較〕

ペロピダス（410-364）は前出。クラウディウス・マルケッルス（265-208）は222年にガリア遠征を行い、216年第2次ポエニ戦争時、カンナエの戦では敗戦の処理を巧みにこなし、211年にはシラクサ攻略に成功する。

## 9 アリスティデス③と大カトー〔付比較〕

アリスティデス（-467）は前出。マルクス・ポルキウス・カトー（234-149）は政治家で著述家。184年に監察官となり、倫理的に厳格な改革を遂行し、ギリシア文化の流入を阻み、カルタゴの殲滅を主張し、初めてラテン語散文で著

述した。

#### 10 フィロポイメンとフラミニヌス〔付比較〕

フィロポイメン（250-183）はアルカディアのメガロポリスの人、アカイア同盟の傑出した將軍。221年、クレオメネス率いるスパルタ軍を撃破、183年、メッセネ遠征の軍に参加し、捕らえられて処刑された。ディオドロスでは断片部の29.18.1に載るが、リウイウス35.25、ユスティヌス29.4、11に挙がる。ティトゥス・フラミニヌス（229-174）はキュノスケファライの戦（197）でフィリッポス5世率いるマケドニアに対して勝利を収めるも、シリア戦に進むため、196年コリントスでのイストゥミア競技会でギリシアの自由を宣言した。

東方セレウコス朝シリアのアンティオコスⅢ世（在位223-187）との外交戦術を巧みに行い、王に対するスキピオ兄弟らのマグネシアの戦（190）での勝利に導く。先に195年、ここに逃れていたハンニバルはさらにビテュニア王ブルシアスの許に逃れたが、フラミニヌスはハンニバルの引渡しを王に要求し、ハンニバルは自殺する（183/2）。

#### 11 ピュッロスとガイウス・マリウス

ピュッロス（319/297-272）は前出。ガイウス・マリウス（157-86）は平民派の將軍・政治家。ユグルタ戦争（112-105）でヌミディアの王ユグルタに勝利するが、88年ミトリダテスの討伐権をめぐるスッラと争い、87年にはスッラ派の大虐殺をローマで実行、翌年病没。

#### 12 リュサンドロス⑥とスッラ〔付比較〕

リュサンドロスは前出。ルキウス・コルネリウス・スッラ（138-78）は貴族派となるローマの將軍・政治家。ユグルタ戦争、次いで同盟市戦争で戦功を立て、88年には執政官に就任。ミトリダテス戦争の指揮権をめぐるマリウスと対立したが、勝利を得て帰国、独裁官の座に就いて元老院の権威を回復し、反動恐怖政治を行った。ユスティヌス37.1に載る。

#### 13 キモン⑤とルクッルス〔付比較〕

キモンは前出。ルキウス・リキニウス・ルクッルス（114-57）は、スッラの下で將軍として頭角を現し、74年、ポントゥス王ミトリダテス6世（在位120-63）との第3次ミトリダテス戦争（74-64）に出征し、戦功を挙げた。晩年は蔵書に囲まれた文化的生活を送った。ユスティヌス37.1に挙がる。

#### 14 ニキアスとクラッスス〔付比較〕

ニキアス（470-413）はアテナイの政治家で將軍。シケリア遠征に敗れる。トゥキディデスの後半部に詳しく記される。ユスティヌスにも載る（4.4, 3）。

クラッスス（115－53）は60年カエサル、ポンペイウスとともに第1回三頭政治をおこなう。53年、カッラエにおけるパルティアとの戦で戦死。

15 セルトリウスとエウメネス<sup>⑱</sup>〔前者がローマ、後者がギリシア；付比較〕

クゥイントゥス・セルトリウス（126－73/2）はイベリア半島を拠点に、8年間にわたってポンペイウスをはじめとするローマ元老院軍に対抗した軍事的指導者。エウメネス（前361－316）は前出。

16 アゲシラオス<sup>㉑</sup>とポンペイウス〔付比較〕

アゲシラオスは前出。ポンペイウス（106－48）は70年に執政官に選ばれ、海賊討伐、対ミトリダテス戦争などにより力を得る。60年、カエサル、クラッススとともに第1回三頭政治に参画するが、のちにカエサルと対立し、48年ファルサロスの戦に敗れ、エジプトに逃げて暗殺された。なおミトリダテス戦争は都合3度〔第1次（88－84）、第2次（83－81）、第3次（74－64）〕におよび、ポンペイウスが最終的勝利を得る。ユスティヌス37.1に載る。

17 アレクサンドロスとユリウス・カエサル

アレクサンドロスは前出。ユリウス・カエサル（100－44）は69年に財務官、63年に終身大神祇官、62年には法務官となり、60年にポンペイウス、クラッススとともに第1回三頭政治を発足させた。58年から51年までガリア戦役に従事し、ポンペイウスを48年、ファルサロスの戦に破り、46年には10年任期の独裁官に就任し、44年にこれを終身としたが、ブルートゥスらによって暗殺された。

18 フォキオン<sup>㉒</sup>と小カトー

フォキオンは前出。小カトー（95－46）は共和政の擁護者でストア主義者。カエサル派に敗れ、自殺。

19 アギスとクレオメネス、ティベリウスとガイウスのグラックス兄弟〔付比較〕

アギス（262－241）、クレオメネス（260－219）はいずれもスパルタの王。アギスIV世は244－241年、またクレオメネスIII世は227－222年に、いずれもスパルタの改革をおこなった。クレオメネスIII世はアンティゴノス・ドソン（263－221）によって破られる。彼らに関してはこのプルタルコスの伝記が貴重な史料となる。ティベリウス（162－133）およびガイウス・グラックス（153－121）兄弟は護民官。兄は133年に護民官となり、リキニウス法（367）の更新を図って大土地所有制を制限しようとしたが、元老院保守派の反対により暗殺された。弟は123年－122年に護民官となり、穀物法・土地法などの改革立法によって元老院を抑えようとしたが失敗し自殺する。彼ら以降、ローマは内乱の

時代に入る。

## 20 デモステネスとキケロ〔付比較〕

デモステネスはアテナイの著名な弁論家。本人の弁論作品、およびこのプラタルコスの伝記によって知られる。マルクス・トゥッリウス・キケロ（106－43）はローマの著名な弁論家。63年執政官に選ばれ、シチリアの太守ヴェッレスを罰し、貴族カティリナの陰謀を暴いたが、その後追放刑に処せられ、57年に帰国する。カエサルとポンペイウス争いに際してはポンペイウスに走り、ポンペイウスはファルサロスの戦（48）に敗れるが、キケロは寛大な措置を受け、隠遁して主として哲学書の執筆に打ち込む。カエサルの死後オクタヴィアヌス方についてアントニウスを攻撃したが、43年第2回三頭政治の成立によりキケロは処刑者名簿に載せられ、刺客によって殺される。

## 21 デメトリオスとアントニウス〔付比較〕

デメトリオス（前336－283；ポリオルケース）はアンティゴノス・ゴナタスの子。307年アテナイに入城、306年にはプトレマイオスをキプロスに破るが、305年ロードス攻囲に失敗する。302年コリントス同盟を刷新するも、301年にはイプソスの戦に敗れ、294年まで逃走、同年アレクサンドロスV世を殺し、マケドニア王となる、288年までその座にあったが、その年、リュシマコスとピュッロスによるマケドニア侵攻にともない敗走、283年に処刑されている。デメトリオスには、断片部の前では18.23.3以降20巻の末尾まで詳細に挙がり、またユスティヌス34.3、8に載る。マルクス・アントニウス（82－30）はキケロによる『フィリッピカ』で激しく攻撃されたが、43年にはキケロに対する公敵宣告を行い、キケロを死に追いやる。のちに40年、ブルンディシウム和約においてオクタヴィアヌスと和解し、オクタヴィアヌスの妹のオクタヴィアと結婚する。36年にはパルティアに遠征。その後エジプトのクレオパトラに近づき、32年にはオクタヴィアを離縁したためオクタヴィアヌスの攻撃を受け、31年アクティウムの海戦に敗れて自殺する。ユスティヌス41.2を参照。

## 22 ディオン<sup>⑩</sup>とブルートゥス〔付比較〕

ディオンは前出。マルクス・ユニウス・ブルートゥス（85－42）は44年、カッスィウスと語らってユリウス・カエサルを暗殺した。42年、フィリッピの戦においてアントニウス・オクタヴィアヌス連合軍に敗れる。ユスティヌス42.4を参照。

ほかに4人の伝記、すなわちアラトゥス（251年シキュオンを僭主政より解放し、アカイア同盟を主宰、243年マケドニアからの自治を回復。リウィウス



32, 21, 23参照), アルタクセルクセス(Ⅱ世, 404-362, 前出), ガルバ, オト(いずれもスエトニウス第7巻を参照)に関する記事が伝えられている。

以上, ネボスとプルタルコスの『英雄伝』を素材に, ギリシアの古典古代期からローマ共和政期に到るまでの英雄群像を辿ってきた。ふつう, ネボスの伝記はプルタルコスの陰に隠れて目立たないが, ペルシア人ダタメスの評伝などは独自の価値を持つ。そしてコノン以下ディオーン, イフィクラテス, カブリアス, ティモテオス, エパメイノンダス, ペロピダス, アゲシラオス, エウメネス, フォキオン, ティモレオンと4世紀に活躍した英雄の名が連なり, 史料としてはトゥキュディデスではなくクセノフォンの『ギリシア史』, もしくはディオドロスに拠らねばならない時代に光が当てられている。またペルシア戦争期のミルティアデスからテミストクレス, アリスティデス, パウサニアス言うに及ばず, 戦間期のキモン, ペロポネソス戦争期のリュサンドロスやアルキビアデスも一貫して東方ペルシアとの政治外交上の関係を有する。そればかりでなく, 上に挙げた同戦戦後の英雄たちに関しても, 387年ペルシアを介した「アンタルキダスの和約」に到るまで, ペルシア側に立つコノン, 反ペルシアのアゲシラオスを両極として, その背後には一貫してペルシアの陰が潜む。

対比列伝体のために, 順不同となるプルタルコスの英雄たちを順に並べるなら, テセウス, リュクルゴス, ソロン, アリスティデス, テミストクレス, キモン, ニキアス, アルキビアデス, リュサンドロス, ペロピダス, アゲシラオス, ティモレオン, デモステネス, アレクサンドロス, フォキオン, エウメネス, デメトリオス, ピュッロス, アラトウス, フィロポイメンとなる。すると, 戦間期にあたるキモン, マンティネイアの戦以降まで生きたアゲシラオスの晩年, クセノフォン以後のティモレオンは, 年代史史料としてはヘロドトス, トゥキュディデス, クセノフォンに照らすことができず, ディオドロスによることが不可欠となる(アゲシラオスの場合は15.93.6)。またアッリアノスの『東征記』には関わらないデモステネスとフォキオン, それにエウメネスもディオドロスに頼る必要がある(フォキオンはユスティノスにも載らない)。またデメトリオスおよびピュッロスは, 前半生はディオドロス, 後半生はリウィウスに拠ることができる。そしてアラトウスとフィロポイメンはリウィウス, ということになる。このように見てくると, ペルシアとの関係を多かれ少なかれ有していたギリシアの英雄たちの史料としては, ギリシア史という趣の濃いトゥキュディデスの『戦史』やクセノフォンの『ギリシア史』, あるいは逆にアレクサンドロスの東征だけを扱ったアッリアノスの『東征記』だけでは決して充

分とは言えず、普遍史を旨として年代史を作成したディオドロス、そしてトログス＝ユスティノスを参照する必要がある、彼らの価値は計り知れないということができよう。またプルタルコスにはローマの英雄が登場するが、彼らの伝記にあっても、スラ、ポンペイウス、クラッスらを介してローマと戦ったパルティアとの接触は顕著であり、その次第は上でも適宜注記したようにユスティノスに載る。

以上、ギリシア史・ローマ史をまず伝記文学から辿ってみたが、ペルシア人・パルティア人の存在は絶大である。ダタメスや、「大王の和約」(386)を成立させる上で一役買ったアルタクセルクセスⅡ世は、単独で「伝記」の一部を構成していた。大王の和約により、スパルタの海上権は失われてアテナイが再び強国の地位を確立することになり、コリントス戦争が終結してアナトリアのギリシア諸都市はペルシアの支配下に入る。またフリュギア太守ファルナバズス(『ギリシア史』1.1.6-5.1.28)や総督ティッサフェルネス(『ギリシア史』1.1.9-4.1.32)、あるいは太守として「サトラップの反乱」を起こすアリオバルザネス(『ギリシア史』1.4.7; 5.1.28; 7.1.27, デイオドロスでは15.90-), 将軍スピトリダテス(-334; 『ギリシア史』3.4.10; 4.1.2-28)や在イオニア・フリュギア総督ティリバズス(『ギリシア史』4.8.12-5.1.30)らはクセノフォンの『ギリシア史』(ないし時にはトゥキュディデス)に登場する。小キュロスの存在に関しては言うまでもないだろう。翻って見た場合、ペルシア王4代の交替記を全巻の軸としたヘロドトスの慧眼は、予言者的とも言えるかもしれない。ではあらためて、アケメネス朝ペルシアからパルティアまで、ペルシア史・パルティア史を軸に、上述の内容との重複を恐れず年代を追うことにしよう。

#### 4. アケメネス朝ペルシア期

ペルシア地方の国家は、古くはヘロドトスに載るメディアを嚆矢とするが、このメディア史についてもヘロドトス『歴史』第1巻に載る。本稿ではアケメネス朝から考察を始めることにしよう。その為政者の交替のうち、ヘロドトス『歴史』に載るのは、キュロスⅡ世(559-529)、カンビュセスⅡ世(530-522)、ダレイオスⅠ世(522-486)、クセルクセスⅠ世(486-465)の4代のみである。これ以降、アルタクセルクセスⅠ世(465-424)、クセルクセスⅡ世(424-423)、ダレイオスⅡ世(423-404)、アルタクセルクセスⅡ世(404-359)、

アルタクセルクセスⅢ世（358－338）、アルセス（338－336）、ダレイオスⅢ世（336－330）を経て、ペルシアはアレクサンドロス大王の統治するマケドニア王国に併合される。この間の史料的状态について、本章からは伝記史料ではない年代記史料を軸に、順に概観してみよう<sup>14</sup>。

ペルシアに関わる事件をめぐり、ギリシアとの「ペルシア戦争」での戦闘については、490年のマラトンの戦いは言うに及ばず、480年に行われたテルモピュライの戦いとサラミスおよびアルテミシオンの海戦、翌479年に行われたプラタイアイの戦いとミュカレの海戦はヘロドトスに収録されている。一方、ディオドロス・シクルスによる『歴史文庫』は、480年から301年まで（第11巻～第20巻）を年代史風に載せる。これは前章まででも触れた点である。

ヘロドトスが筆を擱く479年からトゥキュディデスの『戦史』が始まる432年までは、トゥキュディデスはわずかしき紙幅を割いておらず、ディオドロスはより詳細にこの期間を覆っている。この間のペルシアの動向、すなわち478年（cf. 11.36fin., 「クセルクセスはエクバタナに撤退した」）以降におけるクセルクセスⅠ世（486－465）の動き、および次代のアルタクセルクセスⅠ世（マクロケイル、465－424；11.69－）についてはディオドロスに拠らねばならない。アルタクセルクセスⅠ世の在位中、ギリシアでは431年にペロポネソス戦争が勃発するため、これ以降はトゥキュディデスを参照しうが（cf. 12.37fin., 「アテナイ人トゥキュディデスはこの時から歴史記述をはじめ、＜ペロポネソス戦争＞と呼ばれるアテナイ人とスパルタ人との戦争を記した」）、トゥキュディデスはペルシアにおける為政者の交替までは記録していないため、この間に関してもディオドロスに拠ることになる。すなわち、短命に終わったクセルクセスⅡ世（45日間在位、424－423；12.64）とソグディアノス（6ヶ月半在位、423；12.71）はディオドロスに現れる。次代のダレイオスⅡ世（422－404；12.71－）はトゥキュディデスに登場するが（8.5）、アルタクセルクセスⅡ世（ムネモン、404－362/1：359；13.108－）に関しては、トゥキュディデスの『戦史』が途絶えた411年以降、『ギリシア史』を著して書き継いだクセノフォンに拠らねばならない。かくして、アルキビアデス率いるアテナイ海軍がスパルタに対して勝利を収めるキュジコスの戦（411年）はクセノフォン第1巻1章18節に載る。もっともその記述に関しては、ディオドロスのものとは大幅に異なるため、ディオドロスの記事（第13巻48－51）、あるいはプルタルコス『アルキビアデス伝』（28）も参照されねばならない。

こうして431年から362年までは、トゥキュディデスとクセノフォンにより記

述されているため、ディオドロスはひとまず補助的な役割を負う（cf. 15.89.3「歴史家たちのうちでアテナイ人クセノフォンは、ギリシア人に関する記述をこの年、すなわちエパメイノンダスの死までおこなった」）。この間、ダレイオスⅡ世の次男キュロスは、リュディア、フリュギア、カッパドキアの大部分を統括する司令官として派遣され、これに対してティッサフェルネスは支配権をカリヤのみに限定されたことで恨みを抱いた。キュロスはスパルタを支援し、アルギヌサイではアテナイ艦隊が勝利を収めたが（406；『ギリシア史』1.6.28以下）、アイゴスポタモイではスパルタが決定的に勝利し（405；『ギリシア史』2.1.21）。この戦によりアテナイは穀物補給路を断たれて、ペロポネソス戦争は終結を迎える（404；『ギリシア史』2.2.22）。こうしてペロポネソス戦争末期に関しては、クセノフォンの『ギリシア史』が覆う。

さて上掲のアルタクセルクセスⅠ世がクセルクセスⅠ世を襲う際（465）には、ディオドロスによればクーデターがあり、クセルクセスⅠ世は王位奪取を狙う家臣アルタバノスにより暗殺され、その後このアルタバノスをアルタクセルクセスが倒したとされる（11.69.1－：ユスティヌスでは3.1を参照）。

次にアルタクセルクセスⅡ世に関しては、プルタルコスによる伝記が現存する（『アルタクセルクセス伝』）。またダレイオスⅡ世からこのアルタクセルクセスⅡ世への継承の際、ダレイオスⅡ世の三子（プルタルコスによれば四子）のうち長兄の継承に次子キュロス（401クナクサの戦いで戦死）が争った次第は、遡ってクセノフォンによる『アナバシス』によりわれわれに親しい。このときペルシア側の捕虜となったクテシアスは『アナバシス』1.8.26－27に現れる。彼は『ペルシア誌』を著し、これは散逸したが、のちにディオドロスの内容に受け継がれる。このペルシア内戦におけるスパルタの役割が、その後アルタクセルクセスⅡ世とスパルタの間に戦いを引き起こし（399－394）、ペルシアに仕えていたアテナイの軍人コノンが、バイサンドロス率いるスパルタ軍を394年、クニドスに破った次第は上掲のとおりである（クセノフォン『ギリシア史』4.3.11以下）。このコノンについては、ネボスの第9伝記が当てられていた。その後スパルタと、ペルシアの援助を受けたアテナイ、コリント、アルゴス、テーバイ連合軍の間のコリントス戦争（395－387）は、394年コロネイアの戦い（『ギリシア史』4.3.16以下）でアゲシラオス率いるスパルタ軍がアテナイ・ボイオティア連合軍に対して勝利を収め、アテナイの急速な復興を恐れるペルシアの策により、スパルタ使節アンタルキダスの和約（大王の和約）が387年に結ばれて終息する（『ギリシア史』5.1.35－36）。その後スパルタの策動に反

発したテーバイが379年に反乱を起こし、エパメイノンダスによる指揮の下に371年、レウクトラの戦においてスパルタを打ち破る（『ギリシア史』6.4.4以下）。だがこのテーバイも362年マンティネイアの戦においてスパルタ・アテナイ連合軍に完全な勝利を収めることはできず、エパメイノンダスは戦死する（『ギリシア史』7.5.25）。クセノフォンの『ギリシア史』は、このマンティネイアの戦までの記述である。

クセノフォン『アナバシス』冒頭より、ペルシア王アルタクセルクセス（Ⅱ世、404-）の即位に抗するキュロス（小）をめぐり、彼に「謀反の気配あり」と王に讒訴するティッサフェルネス（-395）はトゥキュディデス『戦史』Ⅷ.5以降、およびクセノフォンの『ギリシア史』に登場する。またアルキビアデス（-404）は同じくトゥキュディデスⅤ.43以降に登場するが、その父クレイニアスは447年コロネイアの戦いで戦死しており、ヘロドトス『歴史』Ⅷ.17に登場する。アルキビアデスは、スパルタが新国王アルタクセルクセスⅡ世よりもキュロ스에接近するつもりであることを察し、アルタクセルクセスに知らせようとするも虚しく、その前に殺されるが（404）、その次第はクセノフォンには載らず、ディオドロスに拠ることになる（14.11.1）。『アナバシス』に描かれる遠征より帰還した兵士たちはスパルタ軍の戦に加わり、沿岸諸都市をペルシアの支配から解放するが、それはスパルタ王に即位したアゲシラオス（Ⅱ世、445/400-359；『ギリシア史』3.3.1）による小アジア侵攻に負い、王はサルディスで勝利を収め、ティッサフェルネスは失脚して処刑される（3.4.25）。アゲシラオスはネボスの第17伝記に登場し、またクセノフォンによる評伝『アゲシラオス王』はネボスによって典拠として用いられたことが知られている。

エジプト関連に目を転ずるなら、その第27王朝はペルシア人による支配であり（B.C.525-404）、カンピュセスⅡ世（530-522）がエジプトに遠征した次第はヘロドトスのⅡ巻によりわれわれにも親しい。その後為政者は、ペルシアの王朝と同じくダレイオスⅠ世、クセルクセスⅠ世、アルタクセルクセスⅠ世と続く。このうち、①ダレイオスⅡ世の没時（404年）、アルタクセルクセスⅡ世の登位直後にエジプトでクーデターが起き、独立王朝が興ったことが推察できる。また②アルタクセルクセスⅡ世の次代のアルタクセルクセスⅢ世は362/1年の登位後エジプトの再征服を目指し、これを341年に成し遂げたことが推察できる。しかし①②のいずれに関しても連続した典拠としては、ディオドロスに拠らねばならない。404年に関しては第14巻（14.69.1-）、362/1年に関しては第15巻（15.90.2-）、343年に関しては第16巻（16.51）を参照すること

になる。ただ404年の件についてはクセノフォンの『アナバシス』および『ギリシア史』も並行する。ちなみに336年のダレイオス登位に関しては17.6.1-を参照。

一方小アジアやキュプロスはペルシアに帰属することになったが、この間アルタクセルクセスⅡ世はエジプト制圧に失敗し、マネトン（前3世紀）の『エジプト誌』梗概によれば、サイスのアミュルタイオスがエジプト第28王朝（B.C.404-399）を興す。その後第29王朝（B.C.399-378）はネフェリテスⅠ世（398-2）、アコリス（392-380）、プサムティス（380-379）、ネフェリテスⅡ世（379-8）、第30王朝（B.C.378-341）はネクトネブフⅠ世（378-360、ネボスXVII.8）、タコス（テオス、361-359）、ネクトネブフⅡ世（359-341）を擁する。ネクトネブフⅡ世は341年エチオピアに逃亡し、第二次ペルシア人統治時代（B.C.341-332）となり、ここにアルタクセルクセスⅢ世（オコス、359:362/1/341-338）、バガオスに毒殺された彼をアルセス（338-336）が継ぎ、ダレイオスⅢ世（336-333）が続く。エジプト側の史料ではエジプトの交替史はこのようになるが、ディオドロスでは、上記の第29王朝ネフェリテスⅠ世が「ネフェレウス」として挙がり（14.79.4）、アコリス（15.2.3-）も挙がるが、短命な王たちについては記載せず、その後すぐ第30王朝に移ったと解してネクトネブフⅠ世（15.42.1）、タコス（15.92.1）、ネクトネブフⅡ世（15.92.3）を載せている。

この間、アルタクセルクセスⅡ世の護衛兵であったダタメス（405-362）は、ネボスの第14伝記に登場するが、ディオドロスにも15.91に現れた。また先のスパルタ王アゲシラオス（445/400-359）は、上掲したタコスとネクトネブフⅡ世の対立に乗じてエジプトに派兵しているが、その次第はネボスの第17伝記に登場していた。

次に362年から336年、すなわちアッリアノスの『東征記』冒頭までは、ディオドロスによる史料がギリシア史家としては唯一となる（15.89.3-16.91.1「ピュトドロスがアルコンの年（336/5）」＝アッリアノス冒頭）。それ以降、336年から323年の夏にかけて、アレクサンドロスに関わる事件はアッリアノスが覆う。したがってフィリッポスが、アテナイ・テーバイの連合軍を破るカイロネイアの戦（338）はディオドロスに拠る（16.85以下；ボンペイウス・トログスにも載る、9.3）。一方アッリアノスの『東征記』には334年グラニコス河畔の戦（1.13.1以下）、333年イッソスの戦（2.6.1以下）、そして331年アルベラ（ガウガメラ）の戦（3.7.1以下）が載り、さらに王宮ペルセポリスが330年に

炎上し (3.18.11), ダレイオスⅢ世は逃走中に命を落とし (3.21.10), アケメネス朝は滅亡するが, この間についてはアッリアノスが第一史料となる<sup>15</sup>。

## 5. 後継者の時代からセレウコス朝シリア期まで

アレクサンドロス大王は, ペルシアを征服したのちも東征を続けるが, 323年にバビロニアにて客死する (アッリアノス『東征記』7.14.10)。その後, 摂政ベルディッカスによる「バビロン暫定体制」が成立し, アレクサンドロスの異母兄フィリッポスⅢ世と, 王の遺児であるアレクサンドロスⅣ世が並立される。このとき書記官長を務めたのがエウメネスであり, 上のネボスに登場していた (318-316総指令)。この時期に発した「後継者戦争」は280年まで続くが, まずベルディッカスがエジプトにプトレマイオスを攻め, 途中で暗殺され (321), フィリッポスⅢ世はその妻エウリュディケとともに317年に殺害される。続いてアレクサンドロス大王の母オリュンピアスもカッサンドロスによって316年に処刑される。さらにアレクサンドロスⅣ世も310年, 母ロクサネとともに殺害され王統が絶える。この間の事情については, 上記のベルディッカスの死は余談的にアッリアノスに載るが (7.18.5), 基本的に『東征記』の記述は323年夏アレクサンドロス大王の死で止められるため, その後の期間はディオドロス, もしくはプルタルコスなどに拠ることになる。

いわゆる「後継者戦争」は, 非常に複雑な様相を呈する<sup>16</sup>。アレクサンドロスの在世時から大王に仕えていた廷臣たちの時期を経て, 豪族たちがそれぞれ子, 孫を儲け, 世代交代を行うからである。まず廷臣の時期には, アンティパトロスがアジアに地盤を有し, クランノンの戦 (322) でギリシア連合軍を破り, デモステネスを自殺させ, 321年にはベルディッカスに対する陰謀に加わり, 摂政の地位を得て319年に没している。またポリュペルコンは322年ラミアの戦で勲功を立て, アンティパトロスに認められて319年その後継者となるが, アンティゴノスとカッサンドロスに交互に仕え, かえって身を落とす。そのアンティゴノス・モノフタルモス (382-301) はフリュギアに地盤を持ち, 321年にはアンティパトロスからアジアの軍指揮を任され, 帝国統一主義の立場を採って西アジアに猛威を振るい (316), カッサンドロス・プトレマイオス・セレウコス・リュシマコスの分離派と対立するが, イブソスの戦 (301) に敗れる。一方カッサンドロスはアンティパトロスの子であり, アンティパトロスから地位を譲り受けたポリュペルコンを駆逐し, 317年にアテナイを制圧, 上記

のように316年オリュンピアスを処刑している。301年にはアンティゴノスを破り、301年から297年にかけてマケドニアを治め、297年に没している。またクラテロスは、アンティパトロスに代わって摂政となるが、321年、先のエウメネスに対するヘレスポントスの戦に敗死している。一方プトレマイオスⅠ世〔-282, ソーテール〕は323年エジプトの太守となり、312年にはガザの戦でセレウコスに対して勝利を収め、304年には王と称し、282年に没している（その子はプトレマイオス・フィラデルフォス〔308-246〕）。アンティゴノス・モノフタルモスの子デメトリオス（337-283）に関しては前出（デメトリオスの子はアンティゴノスⅡ世ゴナタス〔276-239〕である）。一方リュシマコス（360-281）はトラキアを地盤とし、315年アンティゴノスに対してカッサンドロス・プトレマイオス・セレウコスと結び、306年に王となり、301年イプソスの戦で勝利を収め、285年にはピュッロスを放逐するが、281年コルペディオンの戦でセレウコスに敗れ、殺される。結局後継者戦争を制したのは、バビロニアのサトラップ太守セレウコスⅠ世（ニカトール、312-280）であった（子はアンティオコスⅠ世〔280-261〕）。セレウコスはアンティゴノスを支持し、エウメネスとともに316年エジプトに逃れ、バビロンを回復して312年よりセレウコス家を興す。301年イプソスの戦ではアンティゴノスを破り、281年にはリュシマコスを破る。もっとも彼もその翌年、プトレマイオス・ケラウノスによって暗殺され（ケラウノスも戦死）、276年にはリュシマキアの戦が起こり、マケドニアのアンティゴノス朝、シリアのセレウコス朝、エジプトのプトレマイオス朝が成立して、ようやく混乱は終息に向かうことになる（ピュッロスについては前出）。

さてセレウコス朝（B.C.312-63）は、セレウコスⅠ世（ニカトール、312-280）を創始者とする。アッピアノスによれば、彼が没したとき統治期間は42年間であった（11.10.63）とあるため、322年から統治の座にあったことになる。続いてアンティオコスⅠ世（280-261）が、276年ガラティア人の侵攻を撃退、「救済者」となる。さらにアンティオコスⅡ世（261-246）、そしてセレウコスⅡ世（246-225、カッリニコス）が続く。セレウコスⅡ世は、義理の母が自子の権利を主張し、混乱を収拾するのに苦慮した〔アッピアノス66〕。彼は240年パルティアに敗れ、パルティア王国が歴史に登場することになる（後述）。続いてセレウコスⅢ世（225-223）、アンティオコスⅢ世（223-187）と続くが、このアンティオコスⅢ世はマグネシアの戦（190）においてローマに敗れ、188年に和平協約を結んでいる。



マグネシアの戦についての詳細は、アッピアノスの第11巻6章33節に収められている（ユスティヌスの第31巻8章にも載る）。またアッピアノスの同巻9章には、遡ってアレクサンドロス大王没時のシリアの状況が記され、セレウコス朝シリアの興起、バルティアがセレウコス朝より離反した次第がつづられる。そして上述したコルペディオンの戦（281）については、地名こそ挙げられていないものの、同巻10章62節に記される（地名についてはポルフュリオスによる；FGrH260, F3, 8）。

その史料的情况であるが、アレクサンドロスの後継者の時代すなわち323-302年に関しては、ふたたびディオドロスが唯一の典拠となる（第18-20巻）。したがって後継者アンティパトロスがギリシア連合軍を破り、デモステネスが自殺に追い込まれることになるクランノンの戦（322）は、ディオドロスに拠ることになる（18.16.4以下）。第20巻直前の3巻分について、彼は主としてカルディアのヒエロニモスの著作に拠っている。ヒエロニモスはエウメネスにまず仕え、316年にエウメネスが死ぬと、アンティゴノスⅠ世、子のデメトリオスⅠ世、孫のアンティゴノス・ゴナタスに仕えたため、その行軍の経験が生き生きと記された史書であったと推定される。これは272年ピュロスの死にまで及ぶものであった。

従ってアケメネス朝からの次第を再度まとめるならば、①480-432、②362-336、③323-302の3つの時期に関して、ユスティヌスに拠るラテン語の『抄録』（『地中海世界史』）が存在しはするものの、ディオドロスは依拠すべき典拠となっているといえる。ただ史料状況のために、ディオドロスには前301年の「イプソスの戦」が載っていない。しかしアッピアノスには11.9.55に載る。またセレウコスⅠ世によるアナトリア征服の戦は、281年のコルペディオンの戦であるが、リュシマコスが敗れる。これは11.10.62に載る。イプソスの戦はブルタルコス（「デメトリオス」28以下、「ピュッルス」4以下）を用いることもできるが、下って279/8年テルモピュライの戦はパウサニアス『ギリシア案内記』に拠ることになる<sup>7</sup>。パウサニアスは同第Ⅹ巻20-23章で、この戦をクセルクセス到来時のテルモピュライでの戦（480）およびヘロドトスを参照しつつ記している。もとよりギリシアの圏外にあるフリュギアのイプソスでの会戦に関して、パウサニアスには言及がない。

なおこの間、アケメネス朝の傍系に位置し、アルタクセルクセスⅡ世の孫である貴族アルタバゾス（-328以降）がアッピアノス『東征記』に登場する。彼はかつて反乱を起こし（352）、一時マケドニアに亡命していた経緯があり、

その子であるアリオバルザネス、ファルナバズスとともに、ダレイオスⅢ世の死後マケドニアに投降して厚遇され（『東征記』3.23.7）、アルタバズスはバクトリアの太守に任じられている（3.29.1）。

## 6. アルシャク朝パルティア

パルティアは前230年代初めにアルサケスⅠ世が建国している。では以下、下ってタキトゥスの著作に現れるパルティアの為政者までをひとまず通覧してみよう。

パルティアは前247年に自立し、後226にササン朝ペルシアによって滅ぼされるまで存続した王国である。当初の首都はヘカトンピロスであった。王朝を興したのはアルサケスⅠ世（247-214）と言われているが、兄弟のティリダテス（-211）との共同統治であったかも知れず、詳細は不明である。この間240年に、パルティアは上記のセレウコス朝シリアより独立したとされる。なおティリダテスに関してはユスティヌス41.4に言及がある。次代はアルタバヌスⅠ世（アルサケスⅡ世）で統治年代は211年から191年、彼もユスティヌス41.5に載る。これに続くのがプリアパティウス（アルサケスⅡ世）で191年から176年まで、彼もユスティヌス41.5に名が挙がる。続いてフ（プ）ラアテスⅠ世（176-171年）で、ユスティヌス41.5に言及がある。

これに続くのがミトラダテスⅠ世アルサケスⅥ世（171-138）であり、彼に関してはアッピアノスの別巻、ユスティヌス41.5以下のほか、タキトゥス『同時代史』5.8にも名が挙がる。彼は159年から141年にかけてバクトリアの重要な地域を併合し、148/7年にはセレウコス朝下にあったメディアのエクバタナを陥落させている。さらに141年にはバビロニアに入りセレウキアを占領し、139年にはシリアのデメトリオスⅡ世を捕虜としている。これにフラアテスⅡ世（138-128）が続き、彼についてはユスティヌス38.9に言及がある。この間、彼はセレウコス朝のアンティオコスⅦ世（138-129）によりメディアを奪還されている。続いてアルタバヌスⅡ世（Ⅰ世とも；128-124）で、ユスティヌス42.2が掲載している。

これに続き「大王」と呼ばれるミトラダテスⅡ世（大王）アルサケスⅧ世（124-87）の統治する期間が続く。彼は帝国の中心部を西方に移動させ、アルメニアを属国にした。また100年までにメソポタミアを併合し、96年にはローマのスラと交渉してユーフラテス川をローマとの国境としている。彼はユスティヌ

ス42.2に載る。これにシナトルケス（76－70）が続き、その間にメソポタミアがローマ領となる。続いてフラアテスⅢ世（70－58）が統治し、その間には64年にローマのポンペイウスが、ポントゥスのミトリダテスを破り、東部再編に乗り出してシリアをローマの属州としている。続くのがミトラダテスⅢ世（57－55）、さらにオロデスⅠ世〔Ⅱ世、57－38〕である。オロデスはユスティヌス42.4に載り、都をクテシフォンへ移している。53年にはローマのクラッススをカルラエの戦いにて撃破し（第1次パルティア戦役）、死に至らしめ、40年にはシリアを制圧している。だが39年から36年にかけての第2次パルティア戦役ではアントニウスの使節ヴェンティディウス・バッススにより敗れ、38年に殺されている。彼についてはタキトゥスの『同時代史』5.9に載っている。続いてフラアテスⅣ世（38－2）で、ユスティヌス42.4に載る。彼は前20年にアウグストゥスと平和協約を交わし、53年にカッシウスより奪っていた軍旗を返還し、イタリア女奴隷テア・ムサを贈られる。前10年には四人の子、ヴォノネス、フラアテス、ロダスベス、セラスパダネスを人質としてローマに送るが（後の二人はローマにて死去、孫はティリダテスとメヘルダテス〔ヴォノネスⅠ世の子；タキトゥス『年代記』11.10, 12.10－14参照〕）、王妃テア・ムサにより前2年に殺害される。このことに関してはタキトゥス『年代記』2.1に言及がある。なおトログスは41・42巻をパルティアの記述のために割き、第43巻でローマに関する記述に戻っている。

続いて前2年より後4年まではフラアテスⅤ世が統治権を握り、母テア・ムサが摂政となっている。後2年から4年にかけての第3次パルティア戦役については、タキトゥス『年代記』の6.31, 32；11.10に挙がる。4年から7年まではオロデスⅢ世が統治し、続く7から12年まではフラアテスⅣ世の長男、ヴォノネスⅠ世が支配の座に就いている。彼は父親により、紀元前10年に人質としてローマに遣わされた人物で、父親がムサにより前2年に獄死したのを受け、子がフラアテスⅤ世として登位するも、後継者としてオロデスⅢ世を指名、オロデスはその残虐さのゆえに暗殺され、国民の要望に応じてアウグストゥスが送った人物である。この間の経緯はタキトゥス『年代記』の2.1、およびスエトニウス「ティベリウス伝」の49.2に載る。続いて12年から38年にかけてはアルタバヌスⅢ世〔Ⅱ世〕が治め、37年にはローマと和し、アルメニアを放棄している。彼についてはタキトゥス『年代記』2.3, 4, 58；6.31, 33, 36, 37, 41－44、およびスエトニウス「ティベリウス伝」66、「カリグラ伝」14、「ウィテリウス伝」2に挙がっている。彼の子がアルタバヌスⅣ世（タキトゥス『年代

記』11.8), また長男はアルサケスⅡ世である(同6.31, 33; 12.14)。35年から36年には, フラアテスⅣ世の孫ティリダテスが治めるが, 彼はティベリウスにより王として立てられた人物である(『年代記』6.32, 37, 41-44)。続いて39年にはアルタバヌスⅢ〔Ⅱ世〕の子ヴァルダネスが即位する。彼は父の死にともない権力を握るが, 一旦41年ごろ追放に処したゴダルゼス(Ⅱ世?)により, その座から追われておそらく47-48年ごろ没している。ヴァルダネスについては『年代記』11.8, 9, 10, 13.7を, またゴダルゼスに関しては同11.8, 9, 10, 12. 10, 13, 14を参照。なおゴダルゼスは50年, ゾロアスター教典の結集を行い, 51年まで統治している。51年ゴタルゼスの死にともない, アルタバヌスⅡ世〔Ⅲ世〕の兄弟ヴォノネスⅡ世が王となったとされる(『年代記』12. 14を参照)。なおその息子はティリダテスⅡ世(同12.50, 51; 13. 34, 37, 38, 40, 41; 14. 26; 15.1, 2, 4, 14, 24, 27-29; 16.23), およびパコルスであり(同15.2, 14, 31および『同時代史』1.40), パコルスは54年ごろメディア・アトロパテナの王となったが, 72年ごろアラヌス族により追放されている。一方51年からはヴォノネスⅡ世の兄弟ヴェロゲセスⅠ世が76年まで王位に就いたともされ, 彼は58年から63年にかけての第4次パルティア戦役の際, 63年に皇帝ネロと会見している。このヴェロゲセスⅠ世も77年にゾロアスター教経典を結集している。彼についてはタキトゥス『年代記』12.14, 44, 50; 13.7, 9, 34, 37; 14.25; 15. 1-3, 5-7, 9-11, 13-15, 17, 24, 25, 27, 28, 31および『同時代史』1.40, 4.51, およびスエトニウス「ネロ伝」57.2, 「ウェスパシアヌス伝」6.4, 「ドミティアヌス伝」2.2に挙がっている。

こうしてパルティアは, メソポタミア・アルメニアを介し, 西方のローマと一貫して強力に対峙する。スラ, ポンペイウス, クラッスス, ネロらローマ歴代の為政者との接触は重要であり, 「パルティア人」の姿は『使徒行録』にも登場する(後述)。

以上, アケメネス朝からセレウコス朝・パルティアにかけて, 前半はディオドロス, 後半はポンペイウスに拠らねばならない期間が多く, 彼ら「普遍史家」がローマの隣国に触れていることにより, 間接的に年代決定が可能になった期間が多かったことを理解できた。

## 7. 「普遍史」と「他者性」

さて、これまでギリシア・ローマの普遍史的歴史記述を通して、ギリシア・ローマ史を客体化する座標軸としてペルシア（・シリア）・パルティアの存在があったことを見て来た。古典期よりの史家たちの列に連なると考えられる新約聖書の福音史家ルカは、『ルカによる福音書』および『使徒行録』の二書を遺している。冒頭に挙げた拙稿「ビザンティン典礼による聖体礼儀の神学」では『使徒行録』2.7-12を取り上げ、聖霊降臨の地平について神学的解釈を展開したが、そこには「パルティア人」の姿が登場する。

「2.7人々は驚き、驚嘆してこう言った。＜ここで語っている者たちは皆、ガリラヤの者たちではないのか。8 どうしてわれわれは各々、われわれが生まれた場所に固有の地方語で、それを耳にするのだろうか。9 パルティア、メディア、エラムの人々もいれば、メソポタミア、ユダヤ、カッパドキア、ポントスやアジア、10 フリュギアにパンフュリア、エジプトや、キュレネのリビュア地方に住む人々もいる。滞在中のローマ人もいれば、11 ユダヤ人や改宗者たち、クレタ人やアラビア人もいる。彼らがわれわれの言葉で、神の偉大さを語っているのを耳にしようとは＞。12 そして人々は驚き、当惑して互いに言い合った。＜いったいこれは、どういう意味なのだろうか？＞ 13 だが他の者は＜彼らは新しい酒に酔っているのだ＞と言っていた」。

ここで第9節以降に列挙されている諸民族は、東から順に挙げられていること、冒頭にはローマの宿敵であったパルティアが置かれて救いの普遍性が示されていること、などが指摘される<sup>18</sup>。聖体礼儀中に含まれる「聖霊降臨」の場（すなわち、エピクレーシス）において他者の立場にある者は、これを「見る」側にあり、この出来事を証しする諸民族の地平にある。

一方『ルカ福音書』において福音史家は、十字架上にイエスが息絶えたのを見届けたローマの百人隊長が「神に栄光を帰しながら、＜この人は、真に義しき人であった＞」（23.47）と嘆息する姿を書き込んでいる。これは十字架上のイエスの姿が、ユダヤ性を超えてローマ人に達し、福音が世界中に及ぶことの主張であろう。

本稿冒頭に見たことであるが、ビザンティン典礼はマケドニア朝期における様式の完成をもって、また近年における法典の整備をもって、聖体に与かる者の規定を厳格に行いつつ、そこに外界から関わろうとする者の関わり方をも広く規定する。それは、福音書の記事や聖霊降臨時の非限定性に倣うあり方であ

る。

この史観は、広く普遍史観によって育まれてきたものだと言えようが、その普遍史の祖とされたのは、ほかならぬ「歴史の祖」ヘロドトスであった。ヘロドトスは、最終的にギリシアとペルシアの激突に至り、ギリシアの勝利に終息するペルシア戦争を、あえてペルシアの年代交替を軸に記したのであった。

## 8. ビザンティン時代マケドニア朝ルネサンス期との関係

さて本稿冒頭に記した「コンスタンティノスのための抄録集」は53個のテーマの下に、歴史家の作品からそれぞれ該当する箇所を抜粋したものであり、そのうち4個が現存している。それは「使節について」「徳と悪徳について」「陰謀について」「箴言について」である。以下この「抄録集」の構成について、文献学的考察を加えることにしよう<sup>19</sup>。本稿で光を当ててきたディオドロス・シクルスはゴチックで記してある。

I「使節について」 以下、エスコリアル I 04（1621年に焼失）を伝える9写本に拠る。

エスコリアル R Ⅲ14, R Ⅲ21, R Ⅲ13 : E

ヴァティカン, 1418 : V

パリ, 2463 : R

ブリュッセル, 11301-16, 11301-21 : B

ミュンヘン, 267, 185 : M

ヴァティカン, パラティヌス410, 411, 412, 413 : P

(O: E, V, R, B, M, Pに一致した読み)

ミラノ, N. 135sup. : A

ナポリ, Ⅲ B15 : N

ブリュッセル, 8761

焼失した写本はスパニヤード・パキウスの蔵書で、1582年にフルヴィウス・ウルシヌスによって出版されたため「ウルシヌスの抄録」とも呼ばれる。

この作品は、第1部「ローマ人から異国人に宛てて」および第2部「異国人からローマ人に宛てて」より構成されている。以下、順に抜粋が行われた数を併記しつつ、本論に関わる事項を適宜注記しながら、内容を概観する。

## 〔第1部〕

- 1 ベトロス・パトリキオス（500-565） ユスティニアノス帝期の官吏、外交官。ユリウス・カエサル～コンスタンティウスⅡ世（361）の歴史の断片計20個が残る。 3個
- 2 ゲオルギオス・モナコス（866/7?） 人祖アダムから842年までの『年代記』の著者。 4個
- 3 アンティオキアのヨアンネス（7世紀?） アダムから610年までの『年代記』の著者。 1個
- 4 ハリカルナッソスのディオニュシオス 5個
- 5 ポリュビオス 35個
- 6 アッピアノス 11個
- 7 ゾシモス（5-6世紀） 異教世界最後の史家、『新史』の著者。3世紀から410年までを覆う。3世紀および378-410年にかけて唯一である（ちなみに180年（マルクス・アウレリウス帝の死）から238年（ゴルディアヌスⅢ世の登位）までは、ヘロディアノス（178/9-3世紀前半）の史書が覆う。そして353年から378年まではアンミアヌス・マルケッリヌスの『レス・ゲスタエ』が覆う。また『ヒストリア・アウグスタ』がハドリアヌス帝からヌメリアヌス帝まで（117年-284年）を扱い、エウセビオス『教会史』はリキニウス帝の死（324）までを覆う。アウレリウス・ウィクトルはアウグストゥス帝からコンスタンティヌスⅡ世帝までの『皇帝列伝』を著している。2個
- 8 ヨセフス（37-100） 3個
- 9 デイオドロス 1個（31. 15. 2）
- 10 デイオン・カッシオス 21個
- 11 アッリアノス 1個
- 12 プロコピオス（6世紀）、ユスティニアノス帝期の史家、『戦史』8巻の著者。25個
- 13 弁論家プリスコス（410/420-472以降） 『ビザンティオンの歴史』の著者。13個
- 14 ソフィスト・マルコス（5-6世紀） 『ビュザンティアカ』の著者。8個
- 15 メナンドロス・プロティクトール（6世紀後半） 558-582年の『歴史』を記す。20個
- 16 シモカッテス・テオフュラクトス（6世紀） マウリキオスの時期の歴史、8巻を著す。8個

## 〔第2部〕

- ①ポリュビオス 119個
- ②ヨセフス 11個
- ③ゾシモス 5個
- ④デクシッポス（3世紀） 2個
- ⑤ソクラテス 4個
- ⑥ペトロス・パトリキオス（前出） 16個
- ⑦ディオドロス 34個（Ⅷ，10，28-36，40）
- ⑧ディオオン・カッシオス 69個
- ⑨ヘロドトス 2個
- ⑩トゥキュディデス 2個
- ⑪アガティアス（532-580） プロコピオスの後を承け，552-559年の歴史を記す。 3個
- ⑫メナンドロス（前出） 32個
- ⑬シモカッテス（前出） 16個
- ⑭プロコピオス 32個
- ⑮アッリアノス 10個
- ⑯アッピアノス 37個
- ⑰マルコス（前出） 6個
- ⑱プリスコス（前出） 22個
- ⑲エウナピオス（345-420） 7個

## Ⅱ「徳と悪徳について」

写本はトゥールC980（ペイレシアヌス，11世紀）：P

1634年にアンリ・ド・ヴァロワによって出版されたため「ヴァレシウスの抄録」（ないしペイレスクの所蔵であったため「ペイレシアヌスの抄録」とも呼ばれる。

- ①ヨセフス 計76個（ユダヤ古代誌・ユダヤ戦争・アピオン駁論・マカベア戦争・伝記）
- ②ゲオルギオス・モナコス（前出） 38個
- ③ヨアネス・マララス（490-570；『年代記』，創世からユスティニアヌスⅠ



世まで、565まで残存) 14個

- ④アンティオキアのヨアネス (前出) 75個
- ⑤ディオドロス 380個 (I - 39)
- ⑥ダマスコのニコラオス (本稿冒頭に前出; 前64 - 後1世紀, ヘロデ王の大臣,  
『世界史』144巻において, 原初よりヘロデ大王の死まで, ペルシア史を7  
巻分で扱い, 96 - 110巻ではミトリダテス戦争を覆う。123 - 4巻ではヘロデ  
大王に言及し, 前4年までの事件を記す)。 34個
- ⑦ヘロドトス [以下, 下巻] 61個
- ⑧マルケッリノスとトゥキュディデス 計23個
- ⑨クセノフォン, 『キュロスの教育』と『アナバシス』 計20個 (16 + 4)
- ⑩アッリアノス (消失)
- ⑪ディオニュシオス 10個
- ⑫ポリュビオス 124個
- ⑬アッピアノス 36個
- ⑭ディオ・カッシオス 415個

### Ⅲ「陰謀について」

写本はエスコリアル  $\Omega$  I 11 (16世紀) : S, および  
パリ, 1666 : P による。

- ①ダマスコのニコラオス 27個 (長短あり)
- ②アンティオキアのヨアネス 110個
- ③ヨアネス・マララス 51個
- ④ゲオルギオス・モナコス 48個
- ⑤ディオドロス 54個 (I - VII, 30 - 40)
- ⑥ディオニュシオス 3個
- ⑦ポリュビオス 1個

### Ⅳ「箴言について」

写本は, ヴァティカン再利用写本73 (10/11世紀) : V による。

アンジェロ・マイにより1827年に出版されたため「マイの抄録」とも呼ばれる。

- ①クセノフォン『キュロスの教育』 14個
- ②アガティアス 22個
- ③メナンドロス 47個
- ④シモカッテス 53個
- ⑤プロコピオス 78個
- ⑥アッリアノス 18個
- ⑦アッピアノス 23個
- ⑧エウナピオス 82個
- ⑨ポリュビオス 166個
- ⑩デクシッポス 28個
- ⑪ヤンブリコス 1個
- ⑫ペトロス・パトリキオス 191個
- ⑬ディオドロス〔481個；7巻－12巻，15－40巻より〕
- ⑭ディオオン・カッシオス 161個

「抄録集」は、マケドニア朝ルネッサンス期における「百科全書主義」に基づき、古代史家たちのテキストを、実践学すなわち倫理学・政治教育的な観点から活用するために編纂されたものであった。そしてダマスコのニコラオスや、本稿冒頭で紹介したような「普遍史」に関わる史家たちが、多くこの抄録集に採られていることは一見して明らかである。本稿でしばしば言及してきたディオドロスの抜粋は全編に及んでおり、特に第Ⅱ集，第Ⅳ集での数の突出は目ざましい。百科全書主義と「普遍史」への志向性とは、十字架上の聖体への与かりを規定するビザンティン典礼が確立される時期に、見事に合致したと言えるであろう。「抄録集」のおかげで留め記録されたディオドロスの断片部について、本稿で特にその意義を考察したわけではなかったが、そもそもディオドロスの作品が秘めていた普遍史的な性格は、ギリシア・ローマ史を本稿のようにペルシア・パルティア史の流れで照らそうとした場合、非常に強くクローズアップされていた。このことへの注目は、普遍史の抜粋編纂を旨とするビザンティン・マケドニア朝の意向とは、根本的に一致するものだったのである。

## 9. 「他者史」の祖としてのヘロドトス

「普遍史」の観点で記されたディオドロスの著作は、ペルシアやパルティア

のような「他者」に照らしてギリシア・ローマ世界を照らそうとした場合、実に有効な「場」として活用される、ということを本稿で検証してきた。そしてそもそも、そのような「他者史」の枠組みを規定したのが、ほかならぬヘロドトスだったのである。

ヘロドトスによるアケメネス朝ペルシアの王交替記にあって、その筆頭を飾るキュロスⅡ世は、西洋古典文献史ではクセノフォンによる『キュロスの教育』<sup>20</sup>の主要人物として賞揚されるほか、その人徳に関しては一致して高く評価される。ヘロドトスの第1巻にあって、幼き頃に自らを亡き者にしようとしたアステュアゲスにすら、「キュロスは何ら手を加えなかった」(1.130)とされており、キュロスへの評価は、彼の品性に由来するものであった。

このことは旧約聖書史にあって同様であり、キュロスはバビロニアへの捕囚の民となったユダヤの民を解放し、祖国への帰還を認め、民の宗教を保護し、奪われていた財産を返却し、自由を保証した人物として記憶される(『エズラ書』1,1-11)。『イザヤ書』においてキュロスは、「良き知らせを伝える者」(ビッセール; 40,9)と呼ばれるほか、「ふさわしき人」(41,2)、「わたしの牧者」「わたしの望みを成就させる者」、さらには他ならぬ「メシア」(～45,8)とまで称されるに到るのである<sup>21</sup>。

結局、『イザヤ書』にあってこの「キュロス＝メシア」観は否定される。真なるメシアの到来は、十字架上のキリストを俟ってはじめて実現される。それを典礼式次第上に確立したのがビザンティン典礼であった。ビザンティン典礼において、十字架上の聖体に対して外界から与かることになる異邦世界にあって、それはいかなるあり方で可能か、という問いの下に展開してきた本稿であったが、キュロスが「メシア」の予型である、ということは「イザヤ書」そのものが認めているところである。この「メシアの予型」への与かりを果たすうえで、キュロスより筆を起こす歴史記述を「普遍史」ないし「他者史」の枠組みで展開したヘロドトスに倣うことは、十字架上の聖体への与かりのための可能性として、十分に提起されうる方法なのではないだろうか。その意味で、「旧約・福音・使徒書」という聖書内部での3項形成に加えて、「古典古代・新約・ビザンティン典礼」という3項に、新たな可能性を問うことができると考えた。

## 結.

本稿では、「歴史の父」としてのヘロドトスが、特に「普遍史」「他者史」のかたちでペルシアという外界の基準軸の有効性を十全に指し示し、十字架上のメシアを予示するキュロスの意義を明らかにして、証し人としての他者存在の必要性を拓いたということを明らかにしようと試みた。

旧約聖書ではすでにモーセが、毒蛇の傷に抗する手段として柱に青銅の蛇を打ち付け、「これを仰ぎ見る者は生命を得る」(民数21.8-9)と説き、その癒しが真実であったことが記されている。これは「予型による救い」の例だといえるだろう。ビザンティン典礼における「見る」ことによる救いの伝播については、すでに拙稿「ビザンティン典礼による聖体礼儀の神学」で可能性として提言したところであるが、これは「ヨハネ福音書」19.35,36に聖書の典拠を有している。「予型」として提起される存在は、真理の到来のとき、おそらくはそれを「見る」ことによって、自らが拓いた可能性が実現したことを認識するのであろう。それは『マタイによる福音書』第2章に記される「東方三博士の幼子イエス訪問」からも推測されよう。「マゴス」と記されたその博士たちは、おそらくはペルシア出自の者たちであったかもしれない<sup>22</sup>。

われわれ極東世界の者が、この「メシアの予型」にいかにかかりうるか、この問いに対する回答を、さらにインド・イラン語族文化史の研究と、密教・仏教伝播の系列を辿って捉えることは、また稿を改めて論じなければならない。

## 注

- 1 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』48, 1-19, 2005.10。
- 2 ビザンティンの百科事典『スタ』をめぐり、筆者が最初にその存在を知ったのは、久保正彰『ギリシア思想の素地——ヘシオドスと叙事詩——』(岩波新書, 1973年), 86頁を通じてであった。
- 3 「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造——写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に——」, 中世哲学会学会誌『中世思想研究』LI掲載内定, 入稿済み, 2009.9予定。
- 4 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』54, 33-87, 2008.10。
- 5 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』56, 21-56, 2009.10。

- 6 第6巻までの邦訳は、飯尾都人訳『神代地誌』（龍溪書舎，1999年）。なお古典作品のテキストは、ロエブ叢書に収められているものについては原則としてそれを用いた。邦訳に関して、岩波文庫など著名なものについては一々注記することをしない。
- 7 邦訳はポンペイウス・トログス〔ユニアヌス・ユスティヌス抄録〕『地中海世界史』（合阪學訳，京都大学学術出版会，1998年）。ラテン語原典は M. Iuniani Iustini, *Epitoma historiarum philippicarum Pompei Trogi*, ed. O. Seel, Teubner 1972..
- 8 たとえば、岡崎勝世『聖書 vs. 世界史』（講談社現代新書，1996年），5頁を参照。
- 9 cf. J. B. ベリー（高山一十訳）『古代ギリシアの歴史家たち』（未来社，1966年），175頁など。
- 10 cf. K. Clarke, “Universal Perspectives in Historiography”, in: *The Limits of Historiography: Genre & Narrative in Ancient Historical Texts* (ed. by Ch. Sh. Kraus), Leiden/Boston/Köln 1999, 249–279.
- 11 cf. O. Lendle, *Einführung in die griechische Geschichtsschreibung*, Darmstadt 1992, 235–246.
- 12 ネボスの邦訳は『英雄伝』（山下太郎・上村健二訳，国文社，1995年）。
- 13 クセノフォン『ギリシア史』の邦訳は根本英世訳（1–2，京都大学学術出版会，1998–1999年）。
- 14 以下、伊藤義教『古代ペルシア——碑文と文学——』（岩波書店，1974年）を参考にした。
- 15 アレクサンドロスについては、森谷公俊『アレクサンドロス大王』（講談社選書メチエ，2000年）。
- 16 すぐれた概説書として、F. W. ウォールバンク『ヘレニズム世界』（小河陽訳，教文館，1988年）。
- 17 ギリシアの戦争全般については、市川定春『古代ギリシア人の戦争』（新紀元社，2003年）。
- 18 『聖書 原文校訂による口語訳 使徒行録』（フランシスコ会聖書研究所訳注，中央出版社，1969年），37頁参照。
- 19 テキストは Carolus de Boor, Theodorus Buttner-Wobst/Antonius Gerardus Roos, U.P. Boissevain の編纂によるシリーズ（計6巻）*Excerpta Historica iussu Imp Constantini Porphyrogeniti confecta* (Berlin 1903–1910) を参照した。
- 20 邦訳は『クセノポン キュロスの教育』（松本仁助訳，京都大学学術出版会，2004年）。
- 21 イザヤ書の優れた解説書として本田哲郎『イザヤ書を読む』（筑摩書房，1990年）。
- 22 前田耕作『宗祖グロアスター』（ちくま学芸文庫，2003年）が示唆に富む。なおヘロドトス 1.107–8, 132, 140をも参照。